

本日の内容

■背景

• マルチコアの普及、ソフトウェア開発課題-解決技術、並列化について

■eMBPの概要

- eMBPの特徴、外観
- 利用シナリオ、GUI、結果レポート
- eMBPの各機能紹介
- ブロック抽出、SHIM性能見積もり、コア割り当て、コード生成、可視化
- ■開発中/開発検討している新機能
 - 現在開発中/検討している機能の説明
- ■まとめ
- ■参考資料



■背景

eMBP製品・技術の背景

- ■マルチコアの普及
- ■マルチコア・ソフトウェア開発の課題と対策技術
- ■自動並列化とは
- ■並列化されたコードの特徴



背景

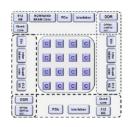
■マルチコア(HW)の普及

既に様々な分野で使われている

- PC,SmartPhone,Tabletでは2~8コアが普通
- HPC分野
- 組み込み機器でも大規模計算の要求が高まる
- 車載システム(自動運転)がけん引

big Cluster Cortex.A15 Cortex.A1







Karlay MPPA(Cluster)

■ チップも進化している

- ARM, Intelの「マルチコア」だけでなく、 KALRAY などの「メニーコアチップ」も進化している。
- クラスタ構造 (コア配置の階層)を持つ。

■マルチコアを有効利用できるソフトウェアの開発が必要

- 実行環境・開発環境の対応
 - OS、開発ツール(設計、検証)
- 設計技術、実装技術が未成熟
 - プログラミング技術の確立(デザインパターン、言語、教育)



マルチコア・ソフトウェア開発の課題と対策技術

マルチコアの活用のためには、ソフトウエアを「並列化」する必要がある

並列化に伴う課題	対策技術の例	
 ■ Mapping ・HWの並列・分散構造とSWの並行構造のマッピングが必要。 ・HW要素・SW要素の組み合わせをみつける [複数のSWC] - [複数のコア] 	 実行環境技術: ・マルチ・メニーコアOS ・動的なマッピング ■ 並列化支援技術: ・自動並列化技術(Parallelizer) ・ 並列構造解析技術 	
■ 並行プログラムの設計・実装 ・並列構造をもつアーキテクチャを設計・実装する手段が必要。	■ 並列設計/プログラミング技術 ・設計技術(並列処理デザインパターン) ・ライブラリ、フレームワーク、言語	
■ 並行プログラムの動作保証 ・並行に動作するプログラムの挙動は複雑。 ・挙動の非決定性由来 ・ソフトウェアの妥当性・安全性を保障する技術が必要。	 ■検証技術(静的/動的) ・静的コード解析技術、 ・形式検証(モデル検査)技術 ・デッドロック検出 ・データ破壊可能性検出 	



自動並列化とは

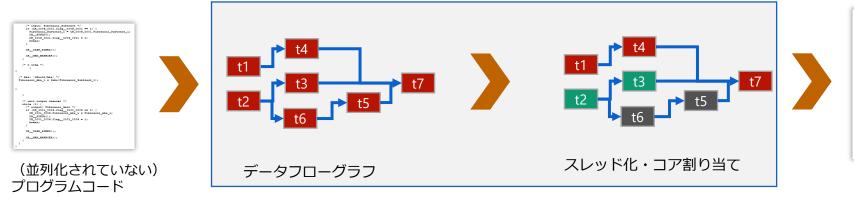
■通常のコードを並列化コードへ変換する

• INPUT:通常のコード(非並列処理)

OUTPUT:並列化コード(並列処理)

■並列化 = 並行処理化(スレッド化) + コア割り当て

- マルチスレッド化されている
- スレッドが別なコアに割り当てられ、物理的に並列動作可能



自動並列化



並列化されたコード



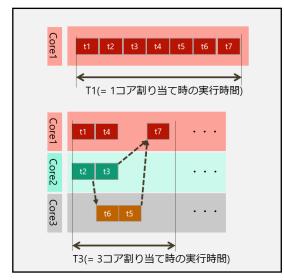
並列化されたコードの特徴

【特徴1】並行動作可能な処理単位(スレッド)をもつ

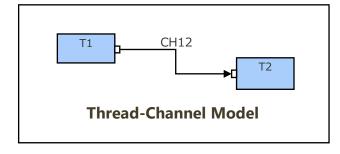
- これらの処理単位が物理的に別々な処理装置(コア等)に割り当てられることで、トータルの処理速度が向上する。
- ■並列動作の表現
 - 非並列処理表現を持たない言語(C言語等)
 - スレッドライブラリによるスレッドの生成API(Posix-Thread etc.)
 - 言語仕様として並行処理表現を持つ言語
 - Go, Occam, Erlang, etc.

【特徴2】スレッド間通信の機構がある

- これにより、「単なる並行動作」でなく「協調計算」を実現
- ■共有メモリを利用するもの
- ■通信チャネルを利用するもの



並列化による処理性能向上

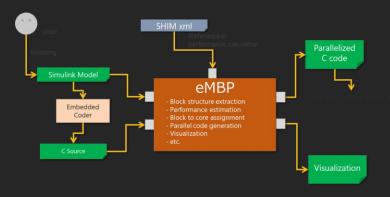


スレッド間通信の例



■eMBPの概要

eMBP ソフトウェア紹介



MBP = Model Based Parallelizer

- ■機能と特徴
- ■eMBPの外観
- ■利用シナリオ&ツール操作
- ■ソフトウェア構成
- ■基本機能一覧



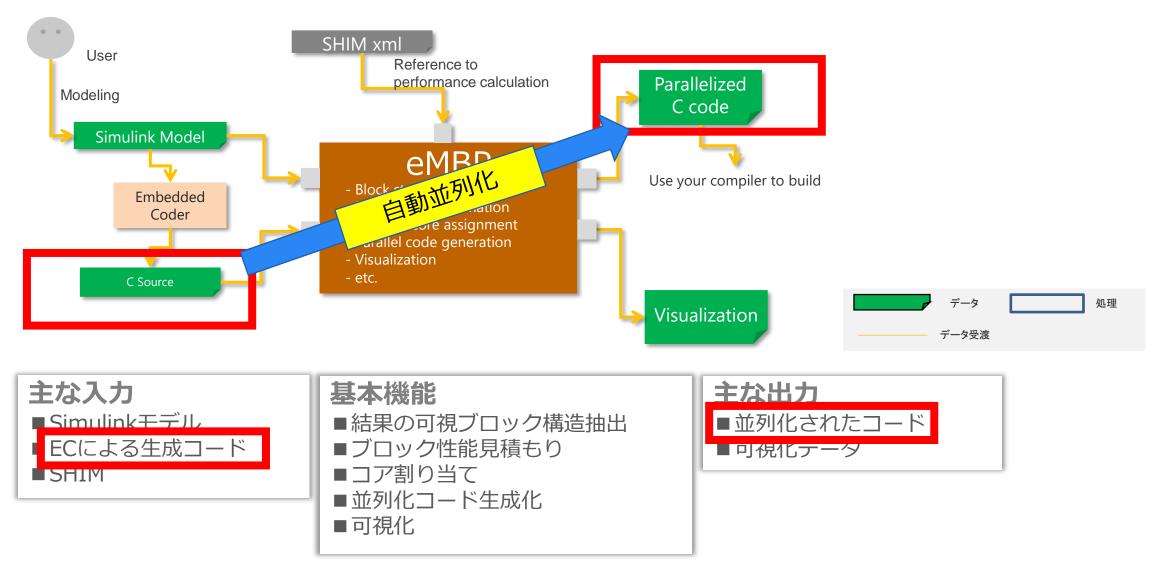
eMBPの機能と特徴

- Matlab/Simulinkで設計された制御モデルから生成されるCソースコードを**並列化**。
- ■モデルの構造を頼りに並列化を行う(設計者の意図を反映できる)。
- ■ブロック毎の実行性能の見積りにハードウェア構造記述SHIM (※1)を採用。
- ■コア割り当ては、「**階層クラスタリング(※2)**」アルゴリズムを利用
- ■並列化コード生成は**eMBPのOSAL層**のAPIを使ったコードを生成するため、ターゲット非依存。
- ■PILS(※3)システムと連携し、モデルベース開発による動作検証を支援。

- %1 Software-Hardware Interface for MULTI-MANY core (IEEE)
- ※2 名古屋大研究成果
- ※3 Processor In the Loop Simulation

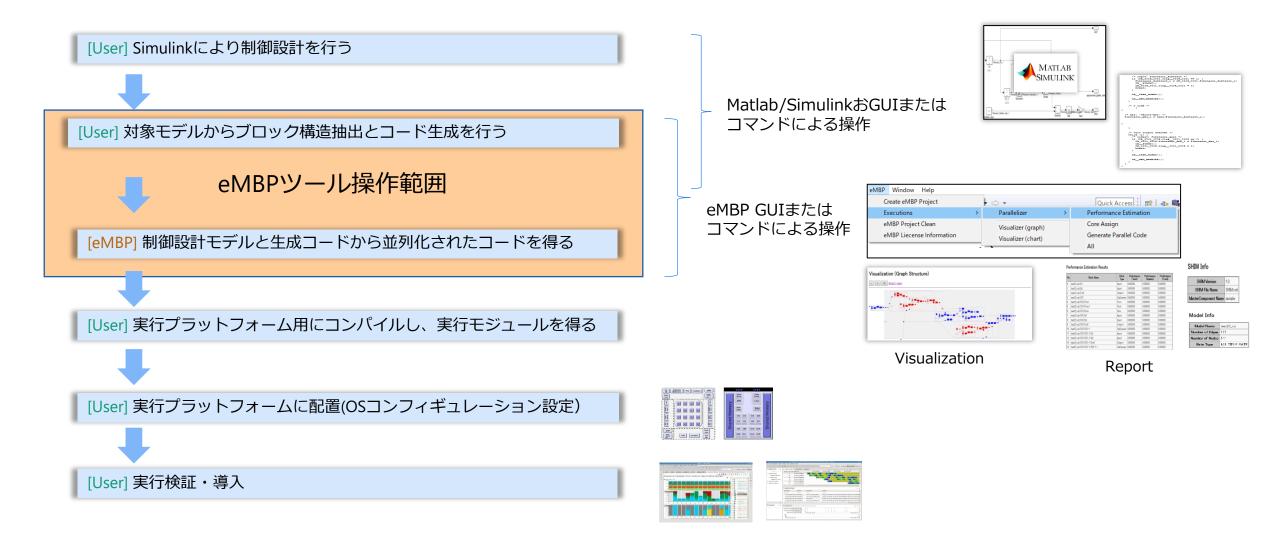


eMBPの外観





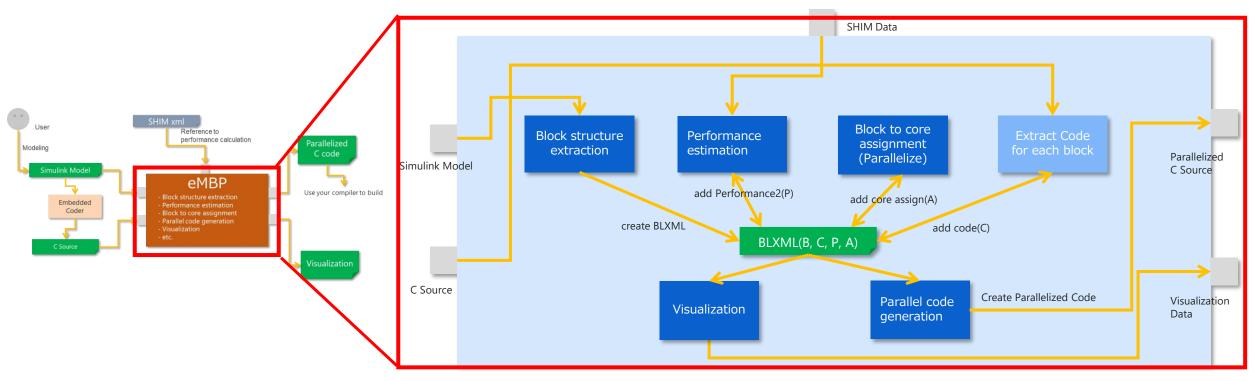
eMBP利用シナリオ&ツール操作





ソフトウェア構成

各機能が共通のブロック構造データBLXMLを参照・追記して連携



BLXMLの各段階	状態
BLXML(B)	Simulinkモデルから ブロック構造 抽出した初期状態
BLXML(B,C)	ブロックに対応するCの ソースコード片 が付加された状態
BLXML(B,C,P)	ブロック毎に見積もられた 性能情報 が付加された状態
BLXML(B,C,P,A)	ブロック毎の コア割り当て情報 が付加された状態



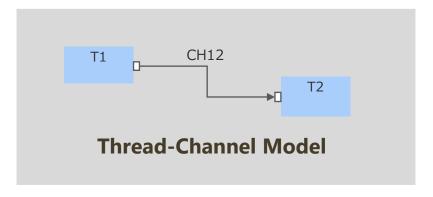
eMBP基本機能

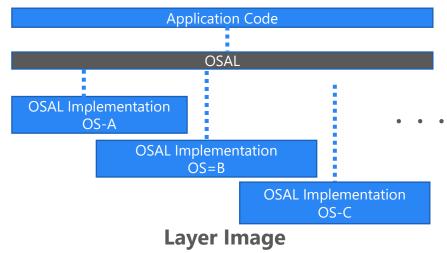
機能	INPUT	OUTPUT	説明	
ブロック構造抽出	SimulinkModel	BLXML(B), C-Code	Simulinkブロック構造を抽出したグラフ、C-CodeはE.C.生成 Constant	
ブロック性能見積もり	BLXML(B),C-Code, SHIM	BLXML(B,C,P)	ブロック毎のコード片をSHIMデータを使って見積もった結果 Block対応LLVM命令列	
コア割り当て	BLXML(B,C,P)	BLXML(B,C,P,A)	「階層クラスタリング」(名大)アルゴリズムによる割り当て	
並列化コード生成	BLXML(B,C,P,A)	Parallelized-C-Code	OSAL(OS-Abstraction Layer)のAPIをCallするコードの生成	
可視化(割り当て結果)	可視化用情報	コア割り当て結果グラフ	Graphvizベースのグラフ配置画像をSVGで出力し、Webブラウザで表示 The state of	
可視化(スケジュール)	可視化用情報	スケジュール・ガントチャート	CTF情報を出力し、外部ツールTraceCompassで表示 Control five Description Descr	



[コード生成補足]eMBP OSAL Concept

スレッド生成、通信に関するコードは、は**OSAL(OS Abstraction Layer)**として定義されているAPIを使った**ターゲット非依存**のものとして生成される。 OSAL実装をターゲット毎に作成する事で、さまざまなターゲットOSに対応可能。





OSAL API	Description	
mbp_thread_create()	Create Thread Object	Thread関連
mbp_thread_start()	Start Thread	THE COURT OF THE C
mbp_channel_create()	Create Channel Object	
mbp_channel_send()	Send Data using channel	_ 通信関連
mbp_channel_recv()	Receive Data using channel	
		_

eMBP OSAL-APIs



■開発中/開発検討している新機能

開発中・検討中機能

- ■今後開発を検討している機能
- ■SHIMを使った性能見積もり精度の向上
- ■形式検証による不具合検出
- ■Software Mapping Toolへの進化



開発中/開発検討している新機能

- ■SHIMを使った性能見積もり精度の向上(開発中)
- ■生成コードのPOSIX API対応(開発中)
- ■ヘテロジニアスマルチコア対応(開発中)
- ■形式検証による不具合検出(検討中)
 - 「並列化に伴う課題/並行プログラムの動作保証」への対応
- ■他ツールとの連携(検討中)
 - 同様の領域を扱うツール群とのツールチェーン
- ParallelizerからSoftwareMappingToolへの進化(検討中)
- その他、継続的な機能改善開発(継続中)
 - 対応要素(Simulinkブロック)を増やす
 - 継続的なUI改善
 - より効果的な可視化表現 色付きのものについて説明



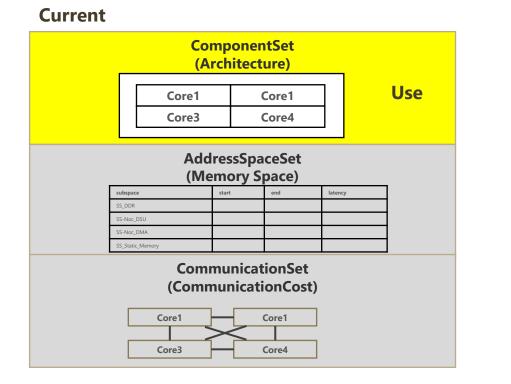
© 2021 eSOL

16

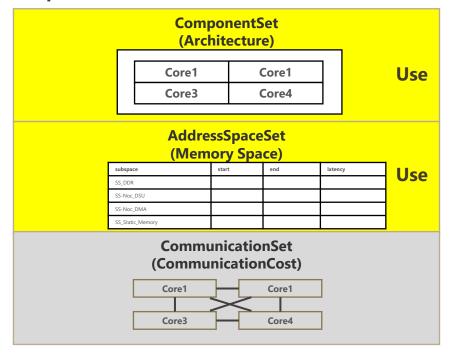
SHIMを使った性能見積もり精度の向上

SHIMの情報の有効活用

- これまではSHIM要素のグループ「ComponentSet」のみ使用
- ・ 精度向上にあたって、メモリアクセス性能の考慮をするため「AddressSpaceSet」の利用
- ・ メモリアクセス性能を計算する際にはCache効果等も考慮する



Improved

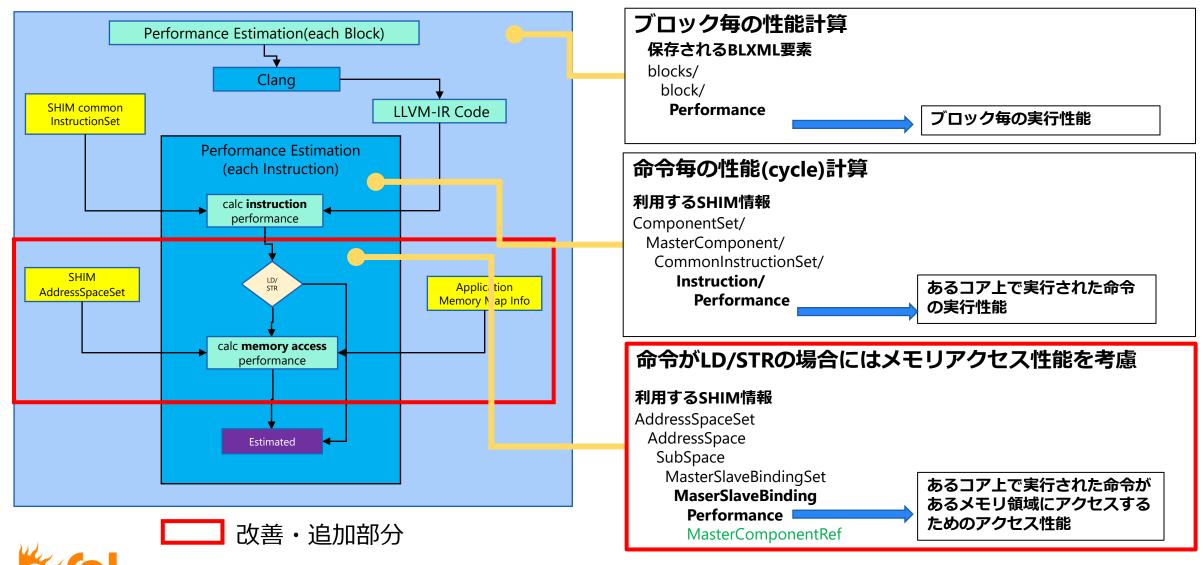




© 2021 eSOL

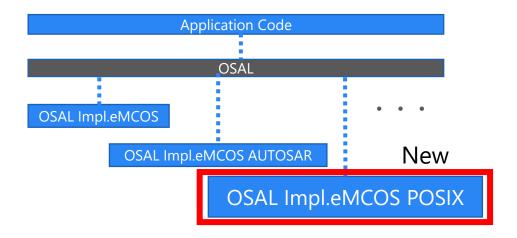
17

SHIMによる性能見積もり精度の向上 (詳細)



eMBP POSIX OSAL Implementation

C言語/Unixでの標準API仕様 POSIXで定義されているThreadAPI(POSIX-Thread)でのeMBP OSAL実装。これによって「POSIX準拠」のOS環境ではどこでも動作させることが可能になる(※)



※ただし、mbp_thread_create()の実装時に必要な、特定のコアへの固定割り当て(Core-Affinity)指定に関しては、OS依存のAPIを利用した実装(pthread_*_np())になる。

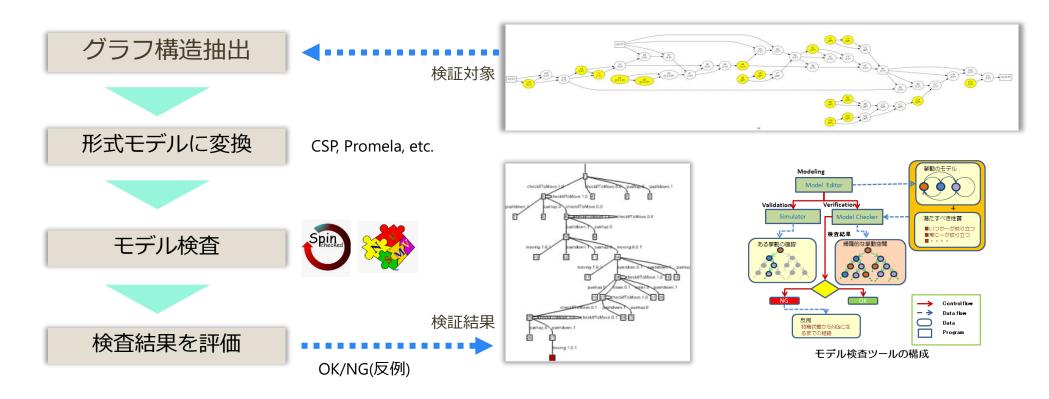
Linux -> pthread_setaffinity_np()
eMCOS -> pthread_attr_setlcid_np()



形式検証による不具合検出

モデル-コア割り当て構造を解析し、並列性に起因するバグの早期発見

- ・デッドロック検出
- ・デッドライン検出
- →コード生成のための内部的なグラフ構造を利用した形式検証等の利用を検討





© 2021 eSOL

20

ParallelizerからSoftwareMappingToolへの進化(※)

■現状のeMBP (Parallelizer)

Simulinkモデル(Cコード)

→ M個のスレッド化されたコード: N個のコア

割り当て問題を解き、並列化ソフトウェアを生成。

■ 一般化 (Software Mapping)

ソフトウェアモデル

→ M個のソフトウェアモジュール: N個のハードウェアユニット

マッピング問題を解き、分散・協調ソフトウェアを生成

■例

●ソフトウェアモデルの例

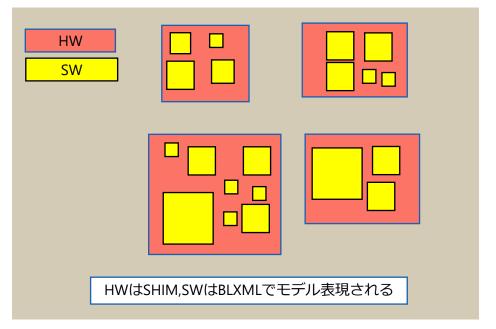
SysMLモデル、Amaltheaモデル、AUTOSARコンポーネント、他

●ソフトウェアモジュールの例

Linuxプロセス、車載・自動運転モジュール、その他高性能計算モジュール

●ハードウェアユニットの例

FPGUボード、GPU、ネットワークに分散されたノード、他









※ NEDO委託研究「高効率・高速処理を可能とする AI チップ・次世代コンピューティングの技術開発/革新的 AI エッジコンピューティング技術の開発/スケーラブルなエッジHPC を実現する OS 統合型プラットフォームの研究開発」実施項目として検討



まとめ

以下の説明を行いました

■背景

- マルチコアの普及
- マルチコアソフトウエア開発の課題と対応技術
- 自動並列化研究
- モデルベース開発

■eMBPの概要

- ・ 機能と特徴
- eMBPの外観
- 利用シナリオ・ツール操作概要
- ソフトウエアの構成
- 基本機能の説明
- 開発中/開発検討している新機能
 - SHIMによる見積もり精度の向上
 - POSIX OSAL実装
 - 形式検証による不具合検出
 - Software Mapping Toolへの進化



■参考資料

補足情報

- ■参考サイト
- ■自動並列化ツール例
- ■SHIM(一般、eMBP利用部分)
- ■デザインパターン
- ■モデル検査技術
- ■モデルベース開発
- ■トレースフォーマットCTF



参考サイト

- eSOL eMBP
 - https://www.esol.co.jp/embedded/mbp.html
- 名大PDSL
 - https://www.pdsl.jp/
- 組み込みマルチコアコンソーシアム
 - http://www.embeddedmulticore.org/
- SHIM(IEEE)
 - https://standards.ieee.org/standard/2804-2019.html
- OpenSHIM(GitHub)
 - https://github.com/openshim/shim
- KARLAY
 - https://www.kalrayinc.com/
- Embedded Target for RH850 Multicore
 - https://www.renesas.com/jp/ja/products/software-tools/tools/model-base-development/embedded-target-for-rh850-multicore.html



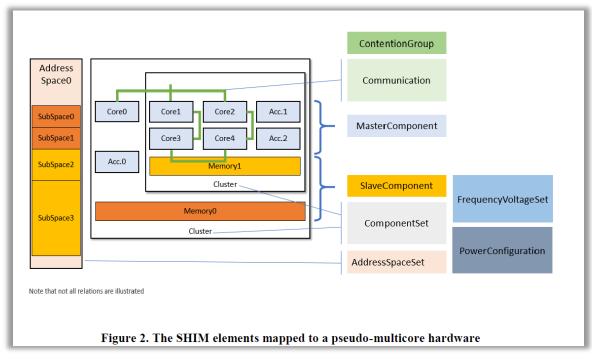
(参考資料1) 自動並列化ツールの例

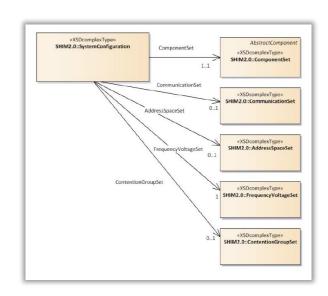
- ■OSCAR 自動並列化コンパイラ(Waseda Univ.)
 - マルチ・グレイン並列化
 - 入力はC言語プログラム
 - OSCAR APIによる並列構造表現
- ■モデルベース並列化(Nagoya Univ.) --- eMBPのベース
 - 「2重階層クラスタリング」
 - 入力はSimulinkモデル(と、モデルから生成されるコード)
 - BLXMLによるブロック構造表現



(参考資料2)SHIM

- ■Software-Hardware Interface for MULTI-MANY core
 - ・ ソフトウェア視点でモデル化されたハードウェア記述(XML形式)
- ■MCAにて仕様策定・標準化され、現在はIEEE標準として認可済み



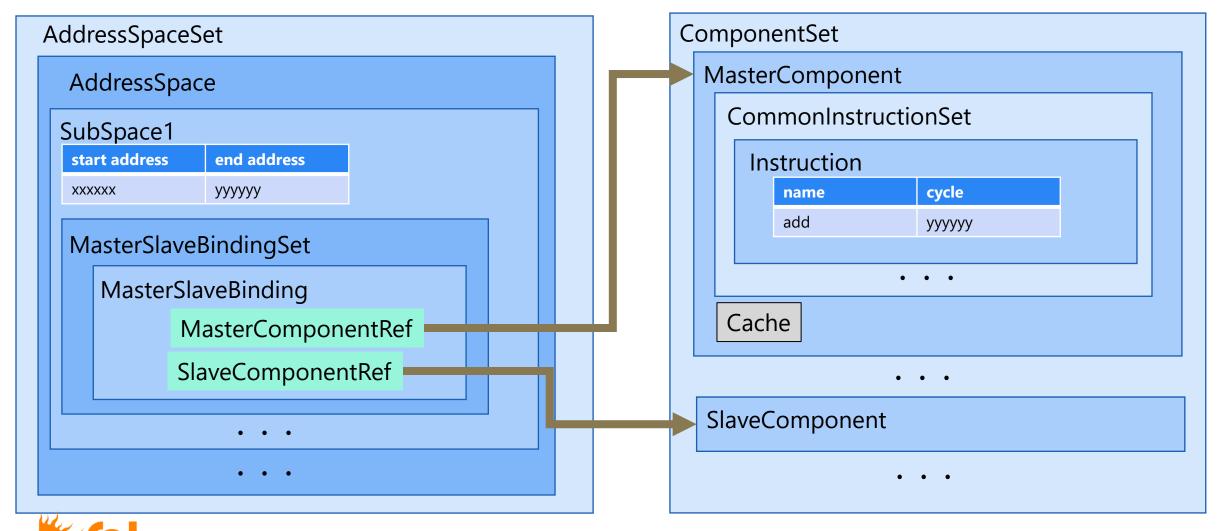


SHIM概念図

SHIM Schema TopLevel

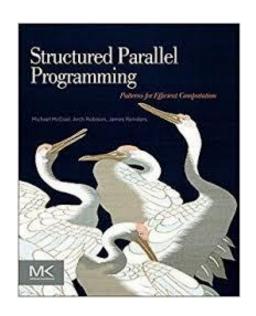


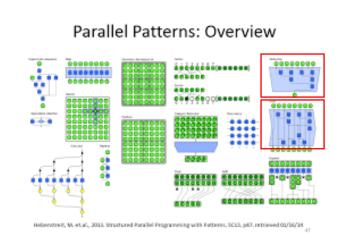
(参考資料3)eMBPが利用するSHIM要素概略図

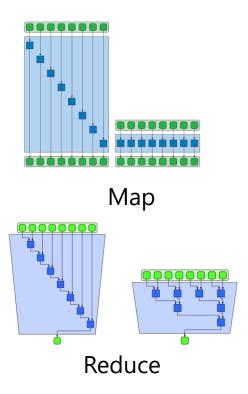


(参考資料4) 並列処理のためのデザインパターン(文献)

- \blacksquare Structured Parallel Programming (\sim Patterns for Efficient Computation \sim)
 - Michael McCool, Arch D. Robinson, James Reinders
 - 並列プログラムを構成するためのパターンを紹介し、後半にはそれらを使った並列アルゴリズムの解説を行っている
 - GoogleのMapReduceなどもパターンの一部







28



(参考資料5)モデル検査技術

ソフトウェアの挙動を状態遷移を元にモデル化し、挙動空間を**網羅的**に探索する事で、システムが与えられた検証式(時相論理式)を満たすかどうかを検査でき

る。 ■ 特徴

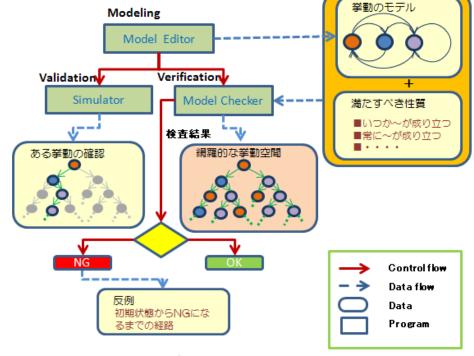
- モデルは形式言語でかかれる
- シミュレーション機能を使った妥当性確認も可能
- 検証がNGの場合には、「反例」と呼ばれるシーケンスが得られる。
- 検証式は時相論理式が用いられる
- モデル検査ツールの例 SPIN,NuSMV,PAT,UPPAALL他











モデル検査ツールの構成

参考URL:https://www.infoq.com/jp/articles/PAT_20111117/



(参考資料6)モデル・ベース開発

■ Model-Based Development/Design

- Modelを起点としたソフトウェア開発手法。モデルを作成し、シミュレーションなどで妥当性を確認した上で、コードを作る(可能ならモデルからコードを自動生成)。
- 設計レベルの妥当性検証を可能にする。
- シミュレーション手法: HILS, SILS, MILS, PILS, …

■ Modelの種類

• Simulinkモデル(車載制御系DefactStandard)、SysML、Modelica(FMI/FMU)

■検証技術

- モデルから生成されたコードの実行とシミュレーションが同等かどうか(B2B Test,等)
- Formal Verificationとも相性が良い。





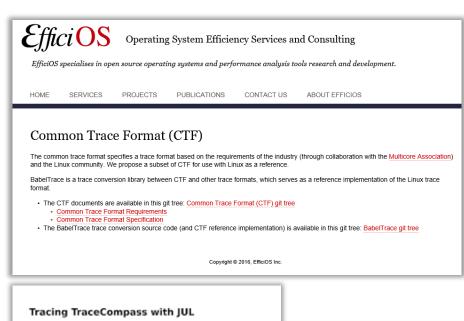


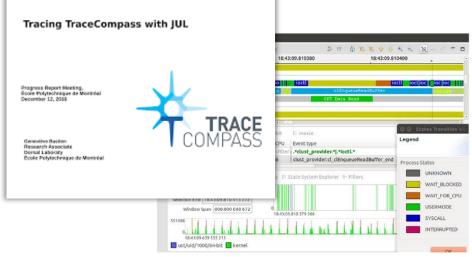




(参考資料7)トレースフォーマットCTF

- Common Trace Format
 - https://www.efficios.com/ctf
- ■対応ツール
 - TraceCompass
 - Eclipse-plug-in
- ■対象ファイルフォーマット
 - トレース要素定義ファイル(DSL) meta
 - イベントを定義
 - 対象ファイル
 - 計測データ





31



Challenge With Passion

